

死者十万人とも
いわれるインド西
部大地震。アジア
医師連絡協議会
(AMDA・岡山)
の一次隊団長とし
て現地に飛んだ三
宅和久医師(39)
が、緊急救援医療
の現場を語った。

聞き手・解説部
勝股 秀通

三宅和久 さんが語る

◆ ◆
地震が発生した
一月二十六日は、往診から戻
って、その足で岡山駅から夜
行列車に乗り込みました。「死
者が百人を超えたら出動」が

ました。到着するなり、
現地のボランティアから
「医者はどうどん必要だ。
もっと手伝ってくれ」と
言われ、早速、大きなテ
ントの一角を仕切って、
患者さんに集まってもら
いました。

通常は、発生から四日
がたつと、内科的な症状
を訴える人が多いが、
建物崩壊のすさまじさが
示す通り、落ちてきた物
で頭や額がパツクリと
割れた人ばかり。しかも
水は不足し、ほこりが
ひどく、患部をサツと洗
ったらパツと縫うという連
続でした。

● AMDAインド地震救援団長

NGOが薬品補充 日没後も患者続々

我々の基準で、常に簡単な外
科用キットなどを準備してい
ます。インド政府の許可がな
かなか下りず、到着は二十九
日でした。

AMDAの一員としてアジ
ア各地で活動中のネパールや
インドの医師らと合流し、日
本人三人を含む十人で、震源
地近くのアンジャル市に入り

は限りがあり、医薬品は一日
で底をついた。ただ、「政府
は何もしてくれないよ」と、
現地の人々が自虐的に笑うよう
に、インドは民間活動団体(N
GO)が盛んで、医薬品だけ
は次々に補充してくれまし
た。

とにかく
一次隊はス
ピードが勝
負。持って
いける物に

治療は日没までだが、患者
は途切れない。問題は自分た

ちの睡眠でしたね。テン
トで毛布にくるまって寝
ましたが、夜は気温が5
度まで下がり、メンバ
ーの体力が日に日に落ちて
いくのが分かりました。

▲一次隊は五日間で三
百二十人を治療した▼

(つづく)



インドの被災現場で、少女の
傷を治療する三宅医師(左)